

## まとめと今後の課題

障害のある子どもたちが、学校や社会の中で自己有能感を感じながら過ごしていくためには、周囲の理解が欠かせないことは言うまでもない。その理解は、知識的なものとともに、相手の気持ちに立って考えるという共感的な視点をも必要とする。本来、日常の場面で、障害のある人々とかかわりながら、障害への理解・支援が促されるのが、もっとも自然で有効な手段であるのかもしれない。しかし、授業といった構造化された枠を使いながら、それらを理解していく必要性も一方では感じられる。

本研究では、そのような障害理解の取り組みに際して活用できるツールの開発を試みた。その際、自分が困りやすい状況と、障害のある子どもたちが困っていると思われる状況とをつなげて提示し、障害のある子どもたちの気持ちについて自然に考えることのできる流れを作ることで、感じる気持ちには共通した点がみられることを強調したいと考えた。このように、障害についての知識を伝えるだけでなく、その子どもの立場になって考えてみるというスタンスをとった。そこで、研究Ⅰでの調査において得られた知見を活かし、極力文字の分量をなくし、「こんな時、〇〇くんはどう思っているかな？」と投げかけることにした。望むべき正解を要求するのではなく、このツールを利用することで、障害のある友だちのことを考えるきっかけが提供できればよいとの結論に達した。

研究Ⅱでは、この障害理解に関するブックレットを実際に使用した教員、子どもたちからの意見、反応を考察した。教員からは、「こういったものは今までになかったのでよい」「LDやADHDなど、通常の学級に多く在籍する子どもについて取り上げられている」といった評価がきかれた。一方で、授業の中で活用するには、配慮点などを詳細にまとめた手引き書が必要なことも示唆された。また、ブックレット以外にも紙芝居や、CD-ROMなど、媒体の拡充も視野に入れる必要があるだろう。子どもたちの反応については、年齢的な発達の影響も考慮する必要があること、それと同時に、子どもたちが普段過ごしているクラスの雰囲気や友人関係といった、様々な要因が関与することも示された。

子どもたちに行った調査では、「あなただったら、〇〇ちゃんに……」という表現で問いかけを行った。その回答の多くは、「(不登校で休んでいるナツ君に対して) 学校の様子を手紙に書いてもっていってあげる」「(本を読むのが苦手なハナちゃんに対して) 小さな声で教えてあげる」など、自分ができることを考えての回答であり、実に多くの、そして有用な支援例であった。

当初は、障害のある子どもについて理解してほしいという気持ちがあった。しかし、今いえることは、このようなツールを用いて行うことができるのは、考えるきっかけの提供であり、子どもたち自身が、自ら何かを感じることでできる機会の提供でしかないということである。

文字通り、『きみのこと、もっとしりたいな—なにかできるかな? なにかできるかな?—』ということに他ならない。